

世界のリアルを集めた



学校図書館へようこそ

学校図書館営業部 宇佐美俊介



■全てはこの本から始まった

読書の目的は「本を読むこと」そのものであって、感想を書くことではない。だから読後に感想文を強制的に書かせるのはナンセンスだと、子どもの頃は本気でそう思っていた。文章を書くことが苦手な子どもにとって、読書感想文は夏休みの宿題の中でも最大の鬼門だったのではないだろうか？かくいう私もその一人だ。夏休みの終わりにはいつも、絶望的な気分で原稿用紙のマス目を埋めていた。

ただ、その苦手だった読書感想文で、自分が題材に取り上げた本の中で、今でも強く印象に残っている作品が一つだけあり、もう絶版で入手できないその本を近くの公共図書館の書庫に見つけたので、借りてきて丁寧に再読してみた。

その本のタイトルは、『白い川の白い町』（アリス館、1975年）。私が感想文を書いたのは小学5年生の時なので1986年（昭和61年）になるが、1975年（昭和50年）の課題図書である。

そもそも、その年の課題図書でもなかったこの本を、なぜ自分が選んだのかは全く記憶がない。「そこに本があったから」としか答えようがない。言ってみれば、ただのコスパである。実はこの本、母親が当時パートとして勤めていた会社の同僚から、「もううちの子は読まないから」と譲り受けた数冊の児童書の中に混じっていたのである。

この本のあらすじを紹介しよう。

時は1971年（昭和46年）。新聞記者である父親の転勤に伴い、東京から愛知県春日井市の高

蔵寺ニュータウンに引っ越してきた小学4年生のアキラは、名古屋駅から高蔵寺駅に向かう電車の窓から「白い川」を発見する。なぜこの街の川の色が、水色ではなく白なのか？そのことに疑問を持ったアキラは、家族や先生、そしてクラスメイトを巻き込んで調査に乗り出す。

陶器工場が陶器を作るときに出す排水が原因ではないか、もしくは陶土が山から流れ出しているのが原因ではないか、という2つの仮説の真偽を検証するために、アキラは家族と庄内川・矢田川・瀬戸川・土岐川などの流域を歩き、クラスメイトと「白い川調査団」を結成し、陶器工場や採掘場などの現地調査を重ね、真実に迫っていく。そして、仮説を立証するためにいくつかの文献にもあたるが、一向に結論は出ない。

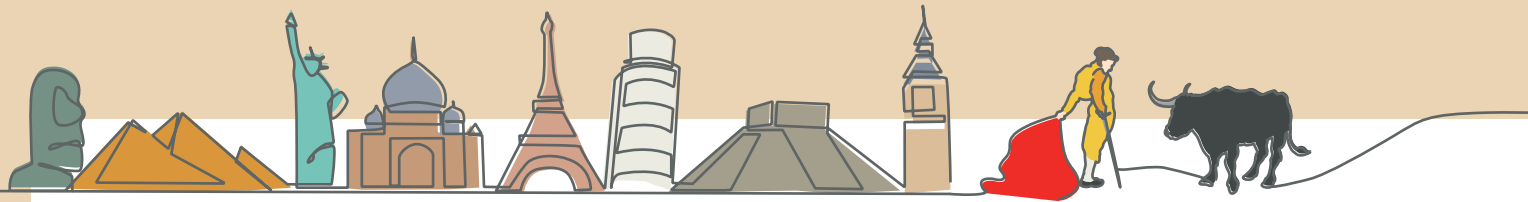
しかし最後に、珪砂にたどり着く。珪砂とは、ガラスや耐火煉瓦に使う原料で、陶土を水に溶かして洗うと採取できる。その洗った水に混ざり、いつまでも沈澱しない白い微粒子が「白い川」の正体だったのだ。

いま読み直してみても、この物語は日本の戦後の高度経済成長や公害の問題ともリンクしていて、かなり内容が濃く、子どもが読むには少々ハードルが高めの本ではあるが、小学生の多感な時期にこの優れてジャーナリスティックな書物と出会ったおかげで、その後の、環境問題をはじめとする多くの社会問題への興味・関心や、物事を複眼的に捉える思考回路の獲得につながったのではないかと私は自得している。

話の展開の中で、担任の先生が「白い川調査団」の子どもたちに向けて語る言葉として、作者が自らの教育論を提示する場面がある。

「たしかに、今の学校のように、子ども自身に考えさ





せることをしないで、ただ教えこむ、おぼえこませると
いうような教育では、何かをやろうとすると、かならず
問題になる。どのようにやっても問題は出てくる。しか
し、ほんとうは、みんな、つめこむだけのやり方には疑
問を持っているし、もっといろいろのことをやってみた
いと思っているはずなんだ。」(山口裕一、1975『白い
川の白い町』アリス館、182頁)

「やりたい人がやりたい活動をする。もちろん勉強を
きちんとやった上でのことだけどね。そう思っている
人が一人でも多く力をあわせていけば、テスト、テスト
の学校を、もっと楽しい学校にかえていくことができ
る。もちろん、これは、うちの学校だけではなく、日本
全国の学校をそうしていかなければならない話なんだけ
どね。」(山口裕一、1975『白い川の白い町』アリス館、
182-183頁)

今で言う「アクティブ・ラーニング」や「非認知能
力を高める教育」の萌芽を感じさせるような発言だが、
1970年(昭和45年)の学習指導要領改定により、戦
後教育史上最大の「詰め込み教育」が始まった当時の時
代背景を思い浮かべてみれば、このような台詞を登場人
物に語らせることで、日本の教育のあり方を暗に批判す
る作者の手法に合点がいく。

■スロー・リーディングのススメ

数十年前に読んだ本を読み返してみて、やはりいろい
ろな発見があった。子どもの頃は全く理解できていな
かったことが、大人になった今なら如実にわかる。こう
いった経験から鑑みると、大人が子どもの読む本を制限
するのは愚の骨頂である。「難しい本だからまだ理解で
きない」などという大人の優しいアテンションは、子ど
もにとっては大きなお世話だ。もし仮にわからないとこ
ろがあったとしても、数年後に読み返した時にストンと
腑に落ちたりする。その時に子どもは自分の内的成長を
実感する。その可能性さえ無残に潰してしまうのだらう

か？

また、悪しき成果主義が社会の隅々まで跋扈する現代
において、読書や映像の視聴さえも読んだ冊数や視聴し
た本数を競い合うような馬鹿げた風潮があることを否定
できない。その成れの果てに生み出されたのが「速読」
であり「倍速視聴」である。だが読書とは本来、どれだ
け本を“読み飛ばしたか”よりも、1冊の本からどれだ
け多くのことを学んだかが大事なのではないだろうか。

そのために重要なのは、スロー・リーディングである。
作家の平野啓一郎氏は『本の読み方 スロー・リーディ
ングの実践』の中で次のように述べている。

「端的に言って、速読とは「明日のための読書」である。
翌日の会議のために速読術で大量の資料を読みこなし、
今日の話題のために、慌ただしい朝の時間に新聞をざつ
と斜め読みする。それに対して、スロー・リーディングは、
「5年後、10年後のための読書」である。それは、今日、
明日という即効性があるわけではないが、長い目で見た
ときに、間違いなく、その人に人間的な厚みを与え、本
当に自分の身についた教養を授けてくれるだろう。私た
ちが尊敬するのは、もちろん、そういう人だ。」(平野啓
一郎、2006『本の読み方 スロー・リーディングの実践』
PHP新書、35～36頁)

「自分にとって本当に大切な本を、5年後、10年後、
と折に触れて読み返してみる。その印象の変化を通じて、
私たちは自分自身の成長のあとを実感するだろう。外
観の変化は、写真や動画が保存してくれる。しかし、内
面の変化を実感させてくれるのは本である。」(平野啓一
郎、2006『本の読み方 スロー・リーディングの実践』
PHP研究所、100頁)

先に、大人が子どもの読む本を制限するなど書いたが、
逆に面白くない本を途中でやめるというのも子どもの自
由である。これについては、稀代の読書家・池澤夏樹氏
の文章を引こう。

「大人は子どもに対して「本は途中で投げ出さないで最後まで読みなさい」「飽きっぽいのはダメ」「途中でやめるのは根気がないから」と言いがちだが、ぼくはそうでもないと思う。確かに、読書習慣を身につけるためには最後まで読むべきかもしれない。だがそれ以前に、本と人のあいだには相性というものがある。ゆえに、つまらないと思ったなら、それは子どもなりの一つの批評なのだから、その批評を尊重すべきだ。なぜなら人には発達段階があり、その子にとってその本をいま読むべき段階であるかどうかは親でもわからないから。「歯がたたない」であれ、「つまらない」であれ、「なんか面白くない」であれ、読むのをやめたいと思ったら、いったん投げ出していい。いかに名著と言われている本であろうと、我慢して読む必要はない。」(池澤夏樹、2017『知の仕事術』集英社インターナショナル、92頁)

本とは、読者の世界を無限に広げ、人生を幾重にも豊かにしてくれる至高のツールである。サバイバルの道具と言い換えてもいい。そんな素晴らしいツールを、子どもの頃に嫌いにならせるような読書指導など無用の長物である。

■ヘミングウェイの『老人と海』

小学生時の読書感想文の思い出に触れたついでに、再読・精読のサンプルとして中学生時のことも記しておこう。私は中学3年の読書感想文の題材に、ヘミングウェイの『老人と海』を選んだ。「短い小説だから簡単に読める」などと侮る向きは、タイトルにも象徴される“老人”と“海”の関係を描写した次の文章を読んでほしい。

「海のことを考えるばあい、老人はいつもラ・マルということばを思いうかべた。それは、愛情をこめて海を呼ぶときに、この地方の人々が口にするスペイン語だった。海を愛するものも、ときにはそれを悪しざまにのしることもある。が、そのときすら、海が女性である

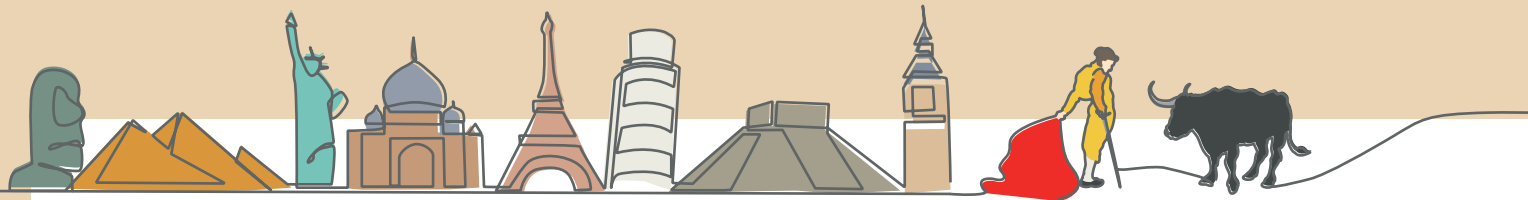
という感じはかれらの語調から失われたためしがない。もっとも、若い漁師たちのあるもの、釣綱につける浮きのかわりにブイを使ったり、鮫の肝臓で大もうけした金でモーターボートを買ってこんだりする連中は、海をエル・マルというふうに男性あつかいしている。かれらにとって、海は闘争の相手であり、仕事場であり、あるいは敵でさえあった。しかし、老人は海を女性と考えていた。それは大きな恵みを、ときには与え、ときにはお預けにするなにものかだ。たとえ荒々しくふるまい、禍いをもたらすことがあったにしても、それは海みずからどうにもしようのないことじゃないか。月が海を支配しているんだ、それが人間の女たちを支配するように。老人はそう考えている。」(アーネスト・ヘミングウェイ、1989『老人と海』新潮文庫、福田恒存訳、24-25頁)

この文章を何の補助線もなしに一読して、意味するところを理解できるだろうか？

この文章の意味を正確に捉えるためには初歩的なスペイン語文法についての知識が不可欠であるが、そのような知識を持ち合わせていない中学生の私が、初読で意味を正確に理解できたとは到底思えない。簡単に解説してみよう。

文中にマルという単語が出てくるが、これはスペイン語で海のことを指す。marと書く。スペイン語の名詞には男性名詞と女性名詞があり、全ての名詞に性別がついている。例えば太陽(sol)は男性名詞、星(estrella)は女性名詞、というように。この場合、単語の意味と文法上の性別は全く関係がない。もちろん関係がある単語もある。男性教師をprofesor(男性名詞)、女性教師をprofesora(女性名詞)、というように。例を挙げ出すときりがないので、これぐらいにしておくが、スペイン語





学習者は全ての名詞について、〈男性・女性〉を把握しておかなくてはならない。なぜなら、スペイン語で会話をしたり文章を書いたりする際に、男性名詞と女性名詞とで冠詞を使い分けなくてはならないからである。

そして mar であるが、文中に「エル・マル (el mar)」と「ラ・マル (la mar)」と定冠詞を変えて二度出てきていることからわかるように、海という単語は例外的に、男性名詞 (el) でもあり女性名詞 (la) でもある、性別が固定されていない特別な単語なのだ。ここを漫然と読み飛ばしてはならない。『老人と海』の物語の中では、若い漁師たちが、海を「仕事場であり闘争の場」として男性名詞扱いしているのに対して、老人は、海を「恵みをもたらすもの」として愛情を込めて女性名詞扱いしているということがわかる。この何気ない一文に、この小説の主題（＝ヘミングウェイの世界観）がしっかりと集約されている。ハードボイルドな文体を駆使し、どの作品でも男性的なイメージが先行するヘミングウェイが、海を女性のメタファーとして描いているのは極めて興味深い。

また、ヘミングウェイはアメリカの作家であり、当然この小説は英語で書かれているが、この物語の舞台はキューバの漁村で、言うまでもなくスペイン語圏である。この小説がアメリカで出版されたのは 1952 年であり、時代的には 1953 年～1959 年に起きたキューバ革命の直前の話となるが、そういった基本的な事柄も中学生の時には全く把握できていなかった。だからこそ、長い時を経ての再読に意味が生じるのだ。

■書を持って、旅に出よう

私は 2016 年の年末から 2017 年の年始にかけてキューバを訪れている。アメリカとキューバが 2015 年 7 月 20 日に双方の大使館を再開し、1961 年から断絶していた国交が 54 年ぶりに回復したのを目の当たりにして、いまこの時期のキューバを自分の目に焼き付けておきたいと強く思ったからだ。

とは言っても、キューバへの渡航は過酷を極めた。中

部国際空港を早朝に出発し、北京・モントリオールを経由し、ハバナの空港に到着したのは、時差の関係で日付こそ当日だが、飛行機のディレイなどもあり、実際には約 25 時間後であった。そしてそこから、預けた荷物の受け取りに小一時間を要し、ようやく空港の建物の外へ出て、お迎えのタクシーを見つけたのも束の間、日本円から CUC への両替の長蛇の列に並んで、また数十分である。私はハバナでは高級外資系ホテルなどではなく普通のご家庭に民泊したのだが、深夜の到着にもかかわらず温かく迎え入れていただいたことに深く感謝している。

疲労困憊した身体に鞭打って、翌日から私はハバナの街へ繰り出した。まずはライフラインの確保。水道水は飲めないのも、毎日水を買う必要があるが、ミネラルウォーターがどこへ行っても 1 種類しかないことに驚きを禁じ得なかった。社会主義国であるだけに、ミネラルウォーターだけでなくコーラなどのソフトドリンクも国営企業の製品一択だ。そして高い。部屋履きのスリッパを求めて靴屋にも行ってみたが、手頃なものは見つからなかった。安くて便利な物に溢れた日本から来ると、やはりカルチャーショックを受ける。

キューバでは 1950 年代のアメ車が、世界中からやってくる観光客を乗せて現役で走っているが、アメリカとの国交が回復したことによりそのような光景も見られなくなる、「時間のとまった国」の時間が動き出す、と言われていたが、私が訪れた時はそこまでの劇的な変化はなく、威風堂々としたクラシックカーが人々の目を釘付けにしていた。



キューバと言えばクラシックカー。1959 年のキューバ革命以降、アメリカに敵視されて国交を断絶。自由に車を輸入することが出来なくなり、1950 年代のアメ車を修理しながら使っている。この光景をずっと見続けたいと思うのはわがままだろうか？

そしてキューバ人は、とにかくよく喋りかけてくる。私はアジアやヨーロッパを歩いていると必ず中国人と間違われ「你好（ニーハオ）」などと挨拶されるが、キューバでは一発で日本人と当ててくる。「イチロー・マツザカ・

デスパイネ」などと知っている野球選手の名前を列挙してくる。ただ意外だったのが、メッシのユニフォームを着て公園でサッカーボールを蹴っている少年たちがいたこと。野球のイメージしかなかったが、それは単なる固定観念である。

街を歩いているとどこからともなく音楽が聴こえてくるが、街角ミュージシャンの演奏技術はすこぶる高い。1990年代に作家の村上龍氏がキューバ音楽を世界最高のポップミュージックだと大絶賛し、Ng La Bandaの日本公演をプロモートしたり、アルバムを制作したりしていたが（村上龍のために作ったという『Murakami's Mambo』は超名曲!）、予想を遥かに凌ぐほど音楽が日々の生活に溶け込んでいる国であった。その当時の村上龍氏の文章を引いてみよう。

「一人のアーティストを生み出すためには、多くのものを消費しなくてはならない。だが、キューバでは自分のピアノも持っていないようなピアニストで、ものすごいプレイヤーがヤマほどいる。そういう国というのは、はたして貧しいのだろうか？」（村上龍、1993『新世界のビート 快楽のキューバ音楽ガイド』新潮社、11-12頁）

「自分が生き延びていく上で、助けとなってくれるもの、それが、一番大事なのだ、ということに気づいた時、キューバにおける音楽の位置がよくわかるだろう。それは、美しく、強いものでなくてはならないのである。」（村



革命広場。メーデーなどでのカストロの演説はこの場所でおこなわれる。多い時には数十万人もの人が広場を埋め尽くすとか。左に見えているのがゲバラの肖像。右はカミーロの肖像。



キューバは日常に音楽が溶け込んでいて、街を歩いているとどこからともなく音楽が聴こえてくる。その演奏レベルの高さは尋常じゃなく、日本の路上ミュージシャンとは比較にならない。

上龍、1993『新世界のビート 快楽のキューバ音楽ガイド』新潮社、13頁）

音楽に限らず、キューバにはマイナスをプラスに変えるという発想がある。キューバは有機農業の先進国であるが、これに代って1989年の冷戦終結から1991年のCOMECON解散、ソ連からの経済援助打ち切り、という流れの中で、農業機械や農薬も手に入らなくなり、食糧危機がリアルに迫っている中で、眼前の危機に対処する手段として必然的に有機農業を選択したのだ。私はハバナの地元民しか行かないような市場を訪れ、マンガーを試食してみたが、今まで経験したことがないような甘さに舌が踊るのを止められなかった。

ノーベル文学賞を受賞するような文豪が、なぜキューバに夢中になっていたのかということに思いを馳せながら、ヘミングウェイゆかりの地を順に巡った。まずは、ヘミングウェイが足繁く通っていたというバー2軒。フロリディータでダイキリ「パパ・ヘミングウェイ」を、ラ・ボデギータ・デル・メディオでモヒートを、注文した。ほろ酔い気分で、ヘミングウェイが長期滞在していたというホテル・アンボス・ムンドスへ。泊まっていた511号室が博物館として公開されているが、中へ入るとガイドがスペイン語で案内をしてくれる。たまたま一緒に入ったオランダ人女性が、親切心からそれを全て英語に通訳してくれる。甘美で素敵な時間が緩やかに流れた。新潮文庫版の『老人と海』も書棚に飾ってあって、より親近感が湧いた。



ヘミングウェイが足繁く通ったバー「フロリディータ」。フローズン・ダイキリ「パパ・ヘミングウェイ」は絶品。どんなに混雑していても、カウンターが一番奥の席にはヘミングウェイの銅像が鎮座している。



次の日には、『老人と海』をここで書いたと言われているフィンカ・ビヒア邸へ。『誰がために鐘は鳴る』の印税で購入し、彼の死後にはキューバ政府に寄贈され、いまはヘミングウェイ博物館として多くの観光客を集めている。タイプライターや蔵書、釣り道具などが保管されていて、作家の日常生活に対して想像力を掻き立てられる。



ハバナ近郊にあるヘミングウェイ博物館。元はヘミングウェイの家で、ここで『老人と海』を書いたと言われている。写真はリビングだが、そのほかの部屋も当時のまま保存されていて、約8000冊の蔵書もそのまま残されている。外観は鬱蒼とした木々に囲まれた白亜の邸宅である。

そしていよいよ、『老人と海』の舞台となった漁村コヒマルへ。ここは、港に面した小さな要塞、ヘミングウェイの胸像、ヘミングウェイの指定席があるラ・テラサという店、以外には何もない場所であった。文学の舞台とはすべからくそんなものである。何も無い場所に作家が魔法をかけて、物語を紡ぎ、特別な場所へと変えてしまうのだ。



コヒマルにあるヘミングウェイ行きつけの店、ラ・テラサ。左奥2番目は彼の指定席だ。



コヒマルにあるヘミングウェイの胸像。台座に「アーネスト・ヘミングウェイ 1898 - 1961」と記されている。



『老人と海』の舞台となったハバナ近郊の小さな漁村コヒマルの小さな要塞。空と海のハーモニーが美しい。

つらつらとヘミングウェイについて書いてきたが、結局何が言いたいかというと、中学生の時に偶然手に取った1冊が何十年も後に、一読者をこんな遠方にまで連れてきてしまうということ。本にはそれだけの力がある。本を読んで感想文を書いて、それで終わりではない。そこから新たな探索と追求の旅が始まるのだ。寺山修司は嘗て、「書を捨てよ、町へ出よう」と書いたが、私

は「書を持って、旅に出かける」ことを強くお勧めしたい。1冊の本は人生を変える。そんな本を学校図書館で見つけられたら素晴らしいじゃないですか。

宇佐美 俊介

愛知県・静岡県担当

学校図書館営業に携わって18年、公共図書館のブックキャラバンも6年目に入ります。もともと図書館は、私にとって独学の拠点という形で存在していましたが、この仕事に従事するようになってからは、理想と現実の間で日々揺れ動いてきたように思います。子どもたちにとって、学校図書館が果てしない世界への扉となることを願ってやみません。

